

論説

北魏後期における皇室の婚姻政策

——北魏国家像の解明にむけて——

佐藤 賢

はじめに

太和一八（四九四）年、孝文帝は、平城から、漢魏晉三代の都にして世界統合の象徴的都市——「土中」「成周」の都洛陽に遷都し、自己の王朝を中国全土を統合する天下国家へ飛躍させようと企図する。そして、非漢族の多様な種族と、華北全域の士大夫たちとの合作・協調を深化させようとし、氏族詳定に踏み切る。では、その実態はどうであったのか。氏族詳定を契機にして北魏はいかなる身分秩序を構築したのか。この北魏国家像に関わる重要問題を、皇室の婚姻政策という観点から考察するというのが、本稿のテーマである。

ところで、近年は石刻資料を活用した研究が増えている。これまでに、北魏時代に関する石刻資料は四五〇件が発見されており、そのうち太和一八年以降のものが四三二件にのぼる⁽¹⁾。かつ、そのなかの三三四件を収載する趙超

『漢魏南北朝墓誌彙編』（天津古籍出版社、一九九二年、以下『彙』）や、最新のものの三九件を収載する羅新・葉煒『新出魏晉南北朝墓誌疏証』（中華書局、二〇〇五年、以下『疏』）などが刊行されており、その活用も容易になったので、北魏後期史の研究において石刻資料が不可欠な資料となっているのである。だが、問題関心の細分化傾向がつよく、王朝の国家像の解明にこれを役立てようとする試みは少ない。婚姻問題についていえば、たしかに一部の中国人研究者によって、石刻資料を活用した研究が発表されているが、その関心は胡漢の氏族間の通婚関係の解明にあって、皇室を中心とする全体像の把握には置かれていない。⁽²⁾

しかし、たとえば『彙』一六六頁掲載の「魏故假節輔国將軍東豫州刺史元（顯魏）公墓誌銘」に、

皇考諱鸞、字宣明、鎮北將軍・冀州刺史・城陽懷王。太妃河南乙氏、父延、故東宮中庶子。夫人長樂馮氏、父熙、故征東大將軍・駙馬都尉・昌黎王、……息崇智、字道宗、年廿四、左將軍府中兵參軍。妻河東薛氏。父和、故南青州刺史。息崇朗、年十八。息崇仁、年十四。息崇禮、年十三。息女孟容、年廿一、適長樂馮孝纂。父聿、故給事黃門侍郎・信都伯。息女仲容、年廿、適南陽員彥。父標、故兗岐涇三州刺史・新安子、諡曰世。

とみえるように、家譜を記しているものがあり、これによって婚姻関係に関する情報を得ることが可能となる。特に皇室のものであるから、その情報量は多い。

そこで筆者は、皇室の婚姻について、『魏書』にくわえ、『彙』『疏』から検出しうる四六件の石刻資料から、歴代皇帝の婚姻、皇族諸王の婚姻、公主の嫁ぎ先を調査した。本稿では、その成果を項目別に表にまとめ、

- ① 北魏前期は、鮮卑系と山東系の士大夫たちの合作・協力によって政權が運営されていたが、後期はどうであったのか。

- ② 皇室の婚姻相手は、八姓と四姓のみに限定できるのか。

③ 従来研究によって、隴西李氏・河東薛氏など、中・下層出身の新興氏族の上昇運動があったと考えられているが、皇室との婚姻関係はもたれたのだろうか。⁽³⁾

以上の三点を考察することで、氏族詳定政策の実態解明と、北魏の国家像の抽出を試みたい。

一 問題の所在

氏族詳定政策についての従来理解を示せば、それは、後漢以来の民族大融合の趨勢のなかで、胡漢諸氏の家格を明確に設定することで、海内の諸氏を統合し、「華夷の界限」を超克し、北魏の支配体制を強固なものとする意図があったという理解になるであろう。魏晉南北朝隋唐史を考えるうえでの重要なキーワードのひとつである「貴族制」、さらには胡漢の「民族問題」という問題関心に立脚した立場から下された評価である。⁽⁴⁾これに対して、本稿では、同政策を婚姻という観点から検討していくのであるが、その理由は、以下のごとくである。

『魏書』卷一二三官氏志が載せる、翌一九（四五〇）年に出された詔には、つぎの一文がある。

詔曰「……其穆・陸・賀・劉・樓・于・嵇・尉八姓、皆太祖已降、勲著当世、位尽王公、灼然可知者、且下司州・吏部、勿充猥官、一同四姓。……」

ここにみえる「四姓」について、唐代ではふつう崔・盧・李・鄭氏を指すとか、或いはこれに王氏をくわえて五姓を指すと考えられていたが、『新唐書』卷一九九儒学中柳沖伝に、

〔柳〕芳之言曰、「……山東則為『郡姓』、王・崔・盧・李・鄭為大。関中亦号『郡姓』、韋・裴・柳・薛・楊・杜首之。代北則為『虜姓』、元・長孫・宇文・于・陸・源・竇首之。『虜姓』者、魏孝文帝遷洛、有八氏十姓、

三十六族九十二姓。八氏十姓、出於帝宗屬、或諸國從魏者。三十六族九十二姓、世為部落大人。並号河南洛陽人。『郡姓』者、以中國士人差第・閥閱為之制、凡三世有三公者曰『膏粱』、有令・僕者曰『華腴』、尚書・領・護而上者為『甲姓』、九卿若方伯者為『乙姓』、散騎常侍・太中大夫者為『丙姓』、吏部正員郎為『丁姓』。凡得入者、謂之『四姓』。又詔代人請曹、初無族姓、其穆・陸・奚・于、下吏部勿充猥官、得視『四姓』。……今流俗獨以崔・盧・李・鄭為四姓、加太原王氏号五姓、蓋不經也。」

とあるように、柳芳がこれを「不經の説」であると斥け、「四姓」とは、甲姓（ただし膏粱・華腴は別格）・乙姓・丙姓・丁姓であると論じたために、姓族詳定を考察する際には、必ず「四姓」の語義が論じられるようになった。

さらに、『隋書』卷三十三經籍志二「譜系」には、

後魏遷洛、有八氏十姓、咸出帝族。又有三十六族、則諸國之從魏者。九十二姓、世為部落大人者、並為河南洛陽人。其中國士人、則第其門閥、有四海大姓、郡姓、州姓、県姓。

とみえ、四海大姓・郡姓・州姓・県姓の四等級があったとするため、これらをどう整合的に解釈するかが研究者の議論の的となった。

たとえば井上晃氏は、「四姓」とは、甲（四海大姓）・乙（郡姓）・丙（州姓）・丁（県姓）姓を指すという解釈を提示され、唐長孺氏は、「四姓」とは甲乙丙丁姓のことであり、これらは全国の郡姓を代表する「四海の大姓」によって構成され、それ以外の郡姓が州姓および県姓になると解釈された。⁽⁶⁾ また、宮崎市定氏は、「四姓」は階級上、甲乙丙丁姓を指しているが、具体的には崔・盧・王・鄭氏を指していると考えても良いとされた。⁽⁷⁾ 『魏書』卷二一上咸陽王禧伝には、

於時、王國舍人庾取八族及清修之門。禧取任城王（澄）隸戸為之、深為高祖所貴。詔曰「……以皇子茂年、宜

簡令正、前者所納、可為妾媵。將以此年為六弟娉室。長弟咸陽王禧可娉故潁川太守隴西李輔女、次弟河南王幹可娉故中書博士范陽盧神宝女、次弟始平王勰可娉廷尉卿隴西李冲女、季弟北海王詳可娉吏部郎中滎陽鄭懿女。」つまり、皇族諸王が、先述の「八姓」、および「清修の門」と婚姻したことが記されているが、この「清修の門」とは、本文では盧・鄭・李氏を指している。また、「四姓」とは地方の名家大族の代名詞であると同時に、『後漢書』卷一九南匈奴伝に、

異姓有呼衍氏、須卜氏、丘林氏、蘭氏四姓、為國中名族、常與單于婚姻。

とあるように、外戚集團の代名詞としてもしばしば用いられる用語であったことが、氏の説の論拠となっている。

そして近年、陳爽氏が、やはり「四姓」とは地方の名族であり、かつ皇室の外戚を指す代名詞であるとし、具体的には、崔（清河・博陵）・盧（范陽）・鄭（滎陽）・王（太原）・李（趙・隴西）の五姓七家を指すとされた。そして北魏皇室は、この「四姓」と通婚關係を構築したと説かれている⁽⁸⁾。

以上から、姓族詳定政策によって、海内諸郡の姓族のランクを確定し、その最上位を占める「八姓」および「四姓」（五姓七家）と、皇室との通婚關係を軸に諸姓を束ねることで支配体制を盤石なものにしようとする、孝文帝の政治的意図が浮かび上がってくる。孝文帝は、太和二〇（四五二）年正月に詔下して、拓跋氏を単姓に改めたが、このとき、わざわざ万物の根源たる「元」を選んだことも、この国家構想と一致しているのは言うまでもない⁽⁹⁾。

しかし、上記の仮説は、あくまでも正史に散見する傍証史料の読解のみから立論されたものであり、皇室の婚姻に関する詳細なデータを収集・分析し、その政策の実態を追究しているわけではないため、概括的である⁽¹⁰⁾。この点を踏み込んで実証し、いわば「北魏貴族制」ともいうべき身分秩序、そして北魏の国家像を検討しようというのが、本稿の企図するところである。

二 歴代皇帝の婚姻動向

【表1】は、歴代皇帝の婚姻をまとめたものであるが、これを氏族ごとに分別してみると、滎陽の鄭氏と安定の胡氏が三件で最多であり、清河崔氏・范陽盧氏・琅邪王氏の二件がこれにつづき、太原王氏・京兆韋氏・隴西李氏・博陵崔氏・彭城劉氏・河南于氏・高句麗高氏・晋室司馬氏・趙郡李氏がそれぞれ一件となっている。

地域別にみると、鄭・崔・盧・王・李氏の「四姓」を筆頭に山東の諸姓が並び、代北の諸姓は于氏の一件にとどまる。隴の諸姓では胡氏に集中し、それ以外にはみられない。しかも孝明帝と胡氏との婚姻は、宣武皇后胡氏が孝明帝の実母として臨朝称制を行なったことに、その理由の過半が求められる。

北魏前期は、①山東系の二流氏族の女、②朝貢国の皇女、③敗戦国（五胡諸政權）の皇女、④帰順勢力の親族、⑤身寄りを喪った者などが、歴代皇帝の婚姻相手や、後宮に納められる対象であって、のちに「四姓」と呼ばれるようになる氏族との婚姻は皆無であったので、この点は、明らかに変化が生じている。ただし、家格という点に目

表1 歴代皇帝の婚姻

皇帝	皇后および妃（出自）		出典
	孝文帝		
	王嬪（王瓊の女、太原）	『魏書』卷三八	
	韋嬪（韋崇の女、京兆）	『魏書』卷四五	
	盧嬪（盧敏の女、范陽）	『魏書』卷四七	

孝明帝	李夫人（李冲の女、隴西）	『魏書』卷五三
	鄭嬪（鄭羲の女、滎陽）	『魏書』卷五六
	鄭嬪（鄭胤伯の女、滎陽）	
	崔嬪（崔挺の女、博陵）	『魏書』卷五七
宣武帝	崔嬪（崔休の妹、清河）	『魏書』卷六九
	劉左孺子（劉長文の女、彭城）	『魏書』卷三二、五五
	鄭嬪（鄭懿の女、滎陽）	
	皇后于氏（于烈の弟勣の女、河南）	『魏書』卷二三、八三下
廢太子恂	皇后高氏（高偃の女、高句麗）	
	皇后胡氏（胡国珍の女、安定）	
	崔嬪（崔亮の女、清河）	『魏書』卷六六
	王夫人（王肅の女、琅邪）	『魏書』卷六三
孝明帝	第一妃嬪司馬氏（司馬金龍孫女、河内）	『魏故世宗宣武皇帝第一貴嬪夫人司馬（顯姿）氏墓誌銘』（『彙』一二〇頁）
	嬪李氏（李統寶の女、趙郡）	『魏故世宗宣武皇帝嬪墓誌』（『彙』一八四頁）
	皇后胡氏（胡盛の女、安定）	『魏書』卷一三
	嬪王氏（王肅の女、琅邪）	『魏書』卷六三
孝明帝	嬪盧氏（盧道約の女、范陽）	『魏故充華嬪盧（令媛）氏墓誌銘』（『彙』一二七頁）
	胡昭儀（胡樂世の女、安定）	『魏故胡（明相）昭儀墓誌銘』（『彙』二〇九頁）

を向けると、注意が払われているのは、山東系に限られるように思われる。前期も後宮に入るのは山東系が中心であつたから、地域的にいえば、この傾向は後期も変わっていないことになる。

三 皇族諸王の婚姻動向

【表2】は、皇族諸王の婚姻をまとめたものであるが、これを氏族ごとに分類してみると、河南穆氏と長樂馮氏とがともに五件で最多であり、安定胡氏・隴西李氏・河南于氏・范陽盧氏がそれぞれ四件、河東薛氏と頓丘李氏が三件、高句麗高氏・河南閻氏・趙郡李氏・廣平程氏・勃海高氏が二件で、滎陽鄭氏・宋室劉氏・安定梁氏・遼東公孫氏・趙郡呂氏・博陵崔氏・樂浪王氏・樂浪韓氏・晋室司馬氏・河南吐谷渾氏・昌黎蘭氏・河南乙氏・河南陸氏・南陽張氏・齊室蕭氏・清河崔氏・南安譙氏・下邳皮氏・遼西常氏が一件という結果となる。歴代皇帝の婚姻よりも、そのヴァリエーションは多彩となっている。

つぎに、これを地域別に分類すると、盧・李・鄭・崔の「四姓」はもちろんのこと、馮氏や程氏、高氏など山東系の諸姓と皇族が広範に婚姻関係を結んでいることが判明する。代北の諸姓では、穆氏が五件、于氏が三件、陸氏が一件といわゆる「代北八姓」との婚姻が見出しうるほか、柔然可汗の血筋である閻氏、或いは吐谷渾氏、乙氏といった諸姓も確認しうる。関隴では、外戚胡氏が最多である。つづいて、李冲の出現によって擡頭した隴西李氏がいる。そのほかでは梁氏・譙氏を挙げることができる。東北の諸姓は五件である。なお、皇后を輩出した外戚勢力という観点からいえば、馮・高・于・胡氏がこれに該当する。

家格という点から考えれば、山東の四大族のみならず、「代北八姓」、隴西李氏が含まれている点で、皇帝の婚姻

表2 皇族諸王の婚姻

① 孝文帝後期

姓 名	妃（出自）	出 典
元 懷	李氏（不明）	『魏書』卷一一
	馮氏（長樂の人）	
元 趙	李氏（李冲の兄の女、隴西）	『魏書』卷一四
元 嘉	穆氏（穆寿の孫女、河南）	『魏書』卷一八
元 麗	崔氏（不明）	『魏書』卷一九上
元 禧	申屠氏（不明）	『魏書』卷二一上
	李氏（李輔の女、隴西）	
元 幹	穆氏（河南）	『魏故龍驤將軍荊州刺史廣川王（元煥）墓誌銘』（『叢』一六八頁）
	趙氏（不明）	
	盧氏（盧神寶の女、范陽）	
	譙氏（譙釐頭の女、南安郡）	
元 詳	劉氏（宋王劉昶の女）	同 右
	范氏（范遵の女、本籍不明）	
	鄭氏（鄭懿の女、滎陽）	
元 燮	高氏（高肇の女、高句麗）	同 右

姓 名	妃（出自）	出 典
元 勰	李氏（李冲の女、隴西）	『魏司徒參軍事元誘命婦馮氏誌銘』（『彙』四三頁）
元 誘	高氏（高肇の女、高句麗）	
	馮氏（馮熙の女、長樂）	
元 龍	皮氏（皮欣の女、下邳）	『魏故使持節平北將軍恒州刺史行唐伯元（龍）使君墓誌銘』（『彙』四八頁）
安樂王の第三子	韓氏（樂浪郡遂城、韓麒麟の外孫）	『大魏揚列大將軍太傅大司馬安樂王第三子給事君夫人韓氏之墓誌』（『彙』七一頁）
元 謚	馮氏（馮脩の女、長樂）	『馮（會）墓誌銘』（『彙』八四頁）
元 遙	梁氏（安定）	『魏故右光祿大夫右護軍饒陽男姓元名遙墓誌』（『彙』九三頁）
元 騰	程氏（廣平）	『大魏故城門校尉元騰墓誌銘』（『彙』一〇九頁）
元 悅	馮氏（馮熙の女、長樂）	『魏故樂安王妃馮（季華）氏墓誌銘』（『彙』一五五頁）
元 嬋	馮氏（馮熙の女、長樂）	『元拳墓誌銘』（『彙』二二六頁）
元 彝	馮氏（長樂）	『魏故使持節都督青州諸軍事車騎大將軍儀同三司青州刺史任城王（元彝）之墓誌銘』（『彙』二二五頁）
元 暉	公孫氏（遼東の人）	『魏故龍驤將軍太常少卿元（俊）君墓誌銘』（『彙』二三二頁）
元 羽	王氏（不明）	『魏書』卷一一
	鄭氏（滎陽）	『魏書』卷五六
	盧氏（范陽）	『魏故使持節假車騎將軍都督晉建南汾三州諸軍事鎮西將軍晉州刺史

元 融	程氏（廣平）	大都督節度諸軍事兼尚書左僕射西北道大行臺平陽郡開國元（恭）墓誌銘」（『叢』二九七頁）
元 叡	穆氏（河南）	
	呂氏（呂檀の女、趙郡）	
元 雍	于氏（于兜の女、河南）	
	盧氏（范陽）	『魏書』卷一一
		「元融妃穆氏墓誌」（『疏』六四頁）
		「元睿墓誌」（『疏』七五頁）
		『魏書』卷二上、四七

② 孝文帝期ないし宣武帝期

姓 名	妃（出自）	出 典
元 均	杜氏（京兆）	
		「王諱均（元均）墓誌」（『叢』三六〇頁）

③ 宣武帝期

姓 名	妃（出自）	出 典
元 雍	崔氏（崔顯の妹、博陵）	
元 叉	胡氏（靈太後の妹、安定）	
元 熙	于氏（河南）	
元 願平	王氏（桑浪）	同右、「魏黃鉞大將軍太傅大司馬安定靖第二子給事君夫人王氏之墓誌」（『叢』五六頁）
		『魏書』卷一九
		『魏書』卷一六
		『魏書』卷二上、四七

姓 名	妃（出自）	出 典
元 諡	胡氏（靈太后之姪、安定）	『魏書』卷二上
元 愉	于氏（順皇后之妹、河南）	『魏書』卷二一
	李氏（本姓楊氏、趙郡李恃顯養女）	同 右
元 悅	閻氏（柔然國主の末裔、河南）	同 右
元 顥	李氏（文成皇后李氏の曾孫、李奇の女、頓丘）	『魏北海王妃故李氏（元羌）誌銘』（『彙』六五頁）
元 珽	穆氏（河南）	『魏輕車將軍太尉中兵參軍元珽妻穆（玉容）夫人墓誌銘』（『彙』一〇九頁）
元 祐	常氏（常閭の女、遼西）	『魏故齊郡王妃常（季繁）氏墓誌銘』（『彙』一三三頁）
元 譚	司馬氏（司馬金龍の子纂の長女、河内）	『大魏元宗正夫人司馬氏誌銘』（『彙』一三六頁）
元 顯 魏	馮氏（馮熙の女、長樂）	『魏故假節補國將軍東豫州刺史元（顯魏）公墓誌銘』（『彙』一六六頁） 『魏故假節補國車騎大將軍青州刺史元（字伯陽）公墓誌銘』（『彙』一九四頁）
元 諶	高氏（高信の女、勃海）	『魏故龍驤將軍荊州刺史廣川孝王（元煥）墓誌銘』（『彙』一六八頁）
元 誘	薛氏（薛胤の長女、河東）	『魏故使持節儀同三司車騎大將軍雍秦二州刺史都昌侯元公夫人薛氏（字伯微）墓誌銘』（『彙』一七四頁）
元 某	薛氏（薛胤の第五女、河東）	『魏前將軍廷尉卿元公妻薛（慧命）墓誌銘』（『彙』二一四頁）
元 逸	李氏（李平の女、頓丘）	『魏故補國將軍廣州刺史元（惜）君墓誌銘』（『彙』二三三頁）
元 略	盧氏（盧尚之の女、范陽）	『魏故侍中驃騎大將軍儀同三司尚書令徐州刺史太保東平王元（略）

元 頤	吐谷渾氏（河南）	「魏故武昌王妃吐谷渾氏墓誌銘」（『彙』二四五頁）
元景略	蘭氏（昌黎）	「魏元氏故蘭（將）夫人墓誌銘」（『彙』二五一頁）
元 恭	閻氏（柔然国主の曾孫、閻世穎の女、河南）	「魏故使持節假車騎將軍都督晋建南汾三州諸軍事鎮西將軍晋州刺史大都督節度諸軍事兼尚書左僕射西北道大行臺平陽縣開国元（恭）墓誌銘」（『彙』二九七頁）
元 徽	于氏（河南）	「魏書」卷一九下、「魏故使持節侍中太保大司馬錄尚書事牧城陽王（元徽）墓誌銘」（『彙』二九九頁）
	乙氏（廣川公乙烏頭の孫女、河南）	

④ 宣武帝ないし孝明帝期

姓 名	妃（出自）	出 典
元 徽	李氏（李冲の孫女、隴西）	「魏書」卷一九下、「魏故使持節侍中太保大司馬錄尚書事牧城陽王（元徽）墓誌銘」（『彙』二九九頁）
元稚舒	崔氏（崔休の女、清河）	「魏書」卷六九
元 肇	高氏（高聿の女、勃海）	「魏故使持節散騎常侍衛大將軍尚書右僕射都督雍岐豳三州諸軍事雍州刺史南平王（元肇）墓誌銘」（『彙』二二六頁）
元懿の長子	陸氏（河南）	「陸孟暉墓誌銘」（『彙』二七一頁）
元 爽	李氏（李平の女、頓丘）	「魏故使持節都督涇岐秦三州諸軍事衛大將軍蕭氏（蕭寶寅の女）秦州刺史尚書左僕射元（爽）公墓誌銘」（『彙』三〇七頁）

⑤ 孝明帝期

姓 名	妃（出自）	出 典
元義興	李氏（趙郡）	『魏書』卷一九下
元 亶	胡氏（胡寧の女、安定）	『魏書』卷八三下
元崇智	薛氏（河東）	『魏故假節補國將軍東豫州刺史元（顯魏）公墓誌銘』（『彙』一六六頁） 『魏故假節補國車騎大將軍青州刺史元（字伯陽）公墓誌銘』（『彙』一九四頁）
元 劭	張氏（南陽） 胡氏（安定）	『魏故侍中驍騎大將軍使持節定州刺史常山文恭王（元劭）墓誌銘』（『彙』二二二頁）

⑥ 孝明帝ないし孝荘帝期

姓 名	妃（出自）	出 典
元 煥	穆氏（穆纂の女、河南）	『魏故龍驤將軍荊州刺史廣川孝王（元煥）墓誌銘』（『彙』一六八頁）

動向と比べ、ある程度それが反映されていたように思われる。

前期の皇族諸王の婚姻相手は、①敗戦国の国主の血筋、②山東系の氏族⁽¹²⁾、③帰順勢力の親族を対象としており⁽¹³⁾、やばりのちに「四姓」と呼ばれる氏族との婚姻はほとんどなかったもので、この点は変化している。

四 公主の嫁ぎ先

【表3】は、公主の嫁ぎ先をまとめたものであるが、これを氏族別に整理すると、范陽盧氏が五件で最多である。特に、孝文帝後期から宣武帝期にかけて、盧道裕・道虔・元聿がそれぞれ樂浪長公主・濟南長公主・義陽長公主を娶ったため、「一門三主、當世以為榮」というように、人々の羨望する隆盛ぶりだった。⁽¹⁴⁾

この盧氏に、晋室司馬氏・清河崔氏・長樂馮氏がそれぞれ三件、高句麗高氏・宋室劉氏・齊室蕭氏・琅邪王氏・河南陸氏が二件、隴西李氏・河南穆氏・河南于氏・滎陽鄭氏・安定胡氏・河南乙氏・勃海刁氏・清河張氏・趙郡李

表3 公主の嫁ぎ先

① 孝文帝後期

姓 名 (出自)	公 主 名	出 典
穆紹 (穆亮の子、河南)	琅邪長公主	『魏書』卷二七、「侍中尚書令太保使持節都督冀相殷三州諸軍事大將軍冀州刺史司空穆(紹)公墓誌銘」(『纂』二八二頁)
陸昕之 (陸定国の子、河南)	常山公主 (献文帝の女)	『魏書』卷四〇
盧道裕 (范陽)	樂浪長公主 (献文帝の女)	『魏書』卷四七
劉承緒 (宋王劉昶)	彭城長公主 (孝文帝的妹)	『魏書』卷五九
于景 (于烈の子、河南)	東陽公主 (元天賜の女)	『魏故武衛將軍正虜將軍懷荒鎮大將恒州大中正于(景)公墓誌銘』(『纂』一九六頁)

② 孝文帝後期ないし宣武帝期

姓 名 (出自)	公 主 名	出 典
盧道虔 (盧道裕の弟、范陽)	濟南長公主 (孝文帝の女)	『魏書』卷四七
盧元聿 (盧度世の子昶の子、范陽)	義陽長公主 (孝文帝の女)	同 右
馮穆 (馮誕の子、長樂)	順陽長公主 (孝文帝の女)	『魏書』卷八三上

③ 宣武帝期

姓 名 (出自)	公 主 名	出 典
司馬肱 (司馬悅の子、河内)	華陽公主 (宣武帝の妹)	『魏書』卷一九下、三七
刁宣 (勃海)	饒安公主 (元略の姉)	『魏書』卷三八
乙瑗 (乙瑗の曾孫、河南)	淮陽公主 (孝文帝の女)	『魏書』卷四四
盧道虔 (盧道裕の弟、范陽)	元氏	『魏書』卷四七
劉輝 (劉承緒の子)	蘭陵長公主 (宣武帝の姉)	『魏書』卷五九、一一一
蕭寶寅 (齊室蕭氏)	南陽長公主	『魏書』卷五九
王肅 (琅邪)	陳留長公主 (もと彭城長公主)	『魏書』卷六三
張彝 (清河)	陳留公主	『魏書』卷六四
崔寅 (崔休の弟、清河)	晉寧公主 (元長樂の女)	『魏書』卷六九

高肇（孝文皇后高氏《宣武帝の実母》の兄、高句麗）	平陽公主	『魏書』卷八二
高猛（高肇の兄琨の子）	高平公主	『魏書』卷八三下
司馬裔（司馬金龍嫡孫、河内）	長樂長公主	『魏書』卷八三下、「高孟妻元瑛墓誌」（『疏』一一八頁）
王誦（琅邪）	寧陵公主（元勰の女）	『魏故寧陵公主墓誌銘』（『彙』五七頁）
馮邕（長樂）	元氏（元猛の女）	『魏徐州琅邪郡臨沂縣都鄉南仁里通直散騎常侍王誦妻元（貴妃）氏墓誌銘』（『叢編』九、二頁）
鄭某（滎陽）	元氏（元暉の女）	『魏直閣將軍補國將軍長樂馮邕之妻元氏墓誌』（『彙』一二八頁）
	元氏（元徽の妹）	『魏故使持節侍中太保大司馬錄尚書事牧城陽王（元徽）墓誌銘』（『彙』二一九頁）

④ 宣武帝ないし孝明帝期

姓 名（出自）	公 主 名	出 典
崔仲文（崔休の子、清河）	元氏（元雍の第二女）	『魏書』卷六九
李長鈞（李憲の子、趙郡）	元氏（元孟和の子）	『魏故使持節侍中都督定冀相殷四州諸軍事驃騎大將軍定州刺史尚書令儀同三司文靜李（憲）公墓誌銘』（『叢』三二八頁）

⑤ 孝明帝期

姓 名（出自）	公 主 名	出 典
爾朱栄（秀容）	北郷郡長公主	『魏書』卷一〇、七四

姓 名 (出自)	公 主 名	出 典
陸昕之 (河南)	元氏 (咸陽王禧の女)	『魏書』卷四〇
裴詢 (河東)	太原長公主	『魏書』卷四五
蕭烈 (蕭寶寅の子)	建德公主 (孝明帝の妹)	『魏書』卷五九
胡祥 (宣武皇后胡氏の兄胡国珍の子、安定)	長安県公主 (元憚の女)	『魏書』卷八三下、「魏故侍中驃騎大將軍恭王 (元劭) 墓誌銘」(『彙』二二二頁)
馮孝纂 (長樂)	元氏 (元顥魏の女)	『魏故假節補国將軍東豫州刺史元 (顥魏) 公墓誌銘』(『彙』一六六頁)、「魏故假節補国車騎大將軍青州刺史元 (字伯陽) 公墓誌銘」(『彙』一九四頁)
員彦 (南陽)	元氏 (元顥魏の女)	同 右
司馬某 (河内)	元氏 (元憚の女)	『魏故侍中驃騎大將軍使持節定州刺史恭王 (元劭) 墓誌銘』(『彙』二二二頁)
盧某 (范陽の人)	元氏 (元憚の女)	同 右
祖子碩 (方城の人)	元氏 (元誕の女)	「□軍將軍靜境大都督散騎常侍方城子祖子碩妻元 (阿耶) 墓銘」(『彙』三三九頁)

⑥ 孝莊帝期

姓 名 (出自)	公 主 名	出 典
李暅 (李冲の孫、隴西)	豐亭公主 (孝莊帝の姉)	『魏書』卷八三下
崔瓊 (清河)	襄城長公主 (孝莊帝の妹)	『魏書』卷八九

氏・秀容爾朱氏・方城祖氏・河東裴氏・南陽員氏が一件とつづく。皇族諸王の婚姻と比べると、その範囲はやや狭いが、家格が反映されているように思われる。だがやはり、「四姓」を筆頭とする山東系と、馮・高・于・胡氏の外戚勢力が中心である。

前期は、『魏書』卷二四崔玄伯伝に、

太祖曾引玄伯講『漢書』、至婁敬說漢祖欲以魯元公主妻匈奴、善之、嗟歎者良久。是以諸公主皆釐降于賓附之國、朝臣子弟、雖名族美彥、不得尚焉。

とあるように、道武帝が崔宏の進言をいれ、公主を政略的に活用して以来、朝貢関係締結の証、その関係の維持、帰順勢力の懐柔という政治的意図から、公主は「賓附の国」に集中的に降嫁され、「朝臣の子弟」に降嫁されるケースが半分以上であったことからすると、後期は、その嫁ぎ先が「朝臣の子弟」に限定されている点において、大きな変化が生じているといえる。ただしこれは、公主の配偶者の全体傾向についての違いである。公主の果たす役割について注目したばあいには、共通点も見出される。

第一の事例として、劉昶一門のケースを紹介したい。劉昶は、劉宋文帝の第九子で、廢帝より異志有りと疑われ、文成帝和平六（四六五）年に、北魏に亡命してきた人物である。もともと南朝からの亡命者の懐柔に熱心な北魏皇室は、公主を亡命者に降嫁し、その間に産まれた男子を嫡子とさせることで、亡命者一門の同族化を図っていたので、劉昶に対しても武邑公主を降嫁した。この公主が亡くなると建興長公主を降嫁し、彼女が亡くなると、さらに平陽長公主を降嫁した。こうして三公主を続けざまに賜った劉昶は、北魏政界で安定した地位を獲得した。ここまですが北魏前期に該当する。つづいて洛陽遷都後になると、公主の産んだ嫡子承緒に、孝文帝的妹である彭城長公主が降嫁される。しかし承緒が父より先にこの世を去ってしまう。劉昶には他に二子いたが、どちらも「疏狂」であ

り、彼はその爵封を失うことを恐れた。そこで年少で、比較的罪過の少ない輝を跡取りとした。かくて宣武帝の姉蘭陵長公主が降嫁され、劉昶一門は家運を繋いでいる。⁽¹⁶⁾このように、公主を降嫁し、その公主が産んだ嫡子に、さらに公主を降嫁するというループは、皇室が亡命者一門の同族化、さらには純血化に入念であったことを示しているが、配偶者の立場からみれば、公主を介して皇室と血の結びつきを持つことで、一門の家勢を保とうとする意図があったことが判明する。

以上の公主の役割が、亡命者のみならず、「朝臣の子弟」にも適用されるのが、後期の特徴なのである。『魏書』卷四〇陸侯伝附昕之伝には以下の記事がみえる。

初、定国娶河東柳氏、生子安保、後納范陽盧度世女、生昕之。二室俱為旧族而嫡妾不分。定国亡後、而子爭襲父爵。僕射李冲有寵於時、与度世子淵婚親相好。冲遂左右申助、昕之由是承爵尚主、職位赫弈。安保沉廢貧賤、不免飢寒。

すなわち、「八姓」の一氏たる東郡王陸定国の一門では、嫡長を二子で争い、これに勝利した昕之が公主を娶る權利を得、栄達する一方で、敗れた安保は、「飢寒を免れず」であった。この昕之は、同じく昕之伝に、

子昕之、字慶始、風望端雅。襲爵、例降為公。尚顯祖女常山公主、拜駙馬都尉。歷通直郎、景明中、以從叔琇罪免官。尋以主壻、除通直散騎常侍。

とある。ここにみえる通直散騎郎とは従五品上の官職で、これを歴任したとあるから、起家官ではなかったのかも知れないが、起家して間もなく通直散騎郎になったであろうことは容易に想定される。このことは、常山公主を迎えた昕之がいかに恵まれた立場に置かれていたのかを明瞭に物語っている。その後、彼は叔父の陸琇が咸陽王禧の謀反に関わった罪によって免官となるものの、「主壻」であることを理由に復帰、通直散騎常侍（正四品下）とな

っている。ここでもやはり公主の婿であることが大きな影響を及ぼしている。

昕之は常山公主との間に、三女を儲けたが、男子は産まれなかった。昕之伝に、

公主有三女無男、以昕之從兄希道第四子子彰為後。……子彰、字明遠、本名士沈。年十六出後、事公主尽礼。

……莊帝即位、徵拜給事黃門侍郎。子彰妻即咸陽王禧女。

とあるように、そこで昕之の從兄陸希道の第四子士沈を養子とし、これを子彰と名づけ後継にした。この子彰は、咸陽王禧の娘を妻としている。子彰は公主の実子ではなかったから、家勢を保つには、皇室との血の繋がりが何とすることも必要だったのである。

さらに事例を徴すれば、『魏書』卷六四張彝伝には、以下の記事がある。

時陳留公主寡居、彝意願尚主、主亦許之。僕射高肇亦望尚主、主意不可。肇怒、譖彝於世宗、稱彝擅立刑法、勞役百姓。

すなわち、張彝が寡婦の陳留公主の降嫁を求め、公主もそれを認めたところに、高肇が横やりを入れ、公主に断られたために、怒って宣武帝に譖言して、張彝を陥れたのである。このように、公主の奪い合いが生じたのも、「尚公主者」となり、皇室の血脈を得ることが、自己の地位の保全や栄達のうえで重要な意味を持っていたからにほかならない。

五 全体分析

本節では、歴代皇帝の婚姻、皇族諸王の婚姻、公主の嫁ぎ先の総計を、幾つかの観点から分析してみたい。まず

地域別にこれを分類してみたい。分類の基準としては、第一に、華山以西を関隴諸姓とした。第二に、代北に出自し、孝文帝に従って南下して洛陽に本貫を移した諸姓、および平城近隣の地域を本貫とする非漢族諸姓を代北諸姓とした。第三に、昌黎・遼西・遼東・樂浪四郡を東北諸姓とした。第四に、残りの諸姓を山東諸姓とした。以上の基準に基づき分類すると、つぎのようになる。

山東諸姓が八〇件で最多、ついで代北諸姓は二一件であり、関隴諸姓一八件、東北諸姓五件とつづく。元氏の婚姻相手は華北全土に満遍なく求められているようにみえて、その実、山東諸姓に比重が置かれていることがまず明確となった。この傾向は北魏前期に既に認められるものであったが、北魏後期に至って、より顕在化している。北魏という政權が、どの地域を主たる基盤として成立していたのかが、明白となろう。

つぎに、氏族に注目すれば、范陽盧氏が一一件を数え最多となっている。つづいて外戚勢力長樂馮氏九件、安定胡氏八件、河南穆氏・清河崔氏・河南于氏・隴西李氏という各地域の大姓がそれぞれ六件、そして滎陽鄭氏・晋室司馬氏の五件などとなっている。崔・盧・鄭・王・李のいわゆる「四姓」と、「代北八姓」(于氏を除く)の合計は四四件、馮・高・于・胡氏の外戚勢力の合計は二六件、両方をあわせると七〇件となる。検出した総件数が一二九件(本籍地不明も含めて)であるから、そのうちの半数以上となる。たしかに、婚姻相手が、「八姓」や「四姓」以外にも、河東薛氏・頓丘李氏・遂城韓氏などの新興層を含めて、広く海内から求めていることは事実であるが、上記の分析結果を踏まえれば、その一方で、大姓・外戚勢力が一定の地位を保ち続けたのも事実である。

その大姓のみで分析してみると、山東四姓では、范陽盧氏(二一件)、清河崔氏(六件)・博陵崔氏(二件)、滎陽鄭氏(五件)、趙郡李氏(四件)、太原王氏(一件)となっている。代北八姓では、穆氏(六件)・陸氏(三件)、および外戚の于氏(六件)となっており、劉氏・尉氏・賀氏・樓氏・嵇氏の諸氏との婚姻の形跡はない。婚姻相手

表4 全体分析

① 山東諸姓（総計：八〇件）

太原郡	王氏 一件（皇帝の妃嬪一件）
滎陽郡	鄭氏 五件（皇帝の妃嬪三件・皇族諸王との婚姻一件・尚公主一件）
清河郡	崔氏 六件（皇帝の妃嬪二件・皇族諸王との婚姻一件・尚公主三件）
	張氏 一件（尚公主一件）
范陽郡	盧氏 一件（皇帝の妃嬪二件・皇族諸王との婚姻四件・尚公主五件）
趙郡	李氏 四件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻二件・尚公主一件）
	呂氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
長樂郡	馮氏 九件（皇族諸王との婚姻七件・尚公主二件）
博陵郡	崔氏 二件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻一件）
頓丘郡	李氏 三件（皇族諸王との婚姻三件）
彭城郡	劉氏 二件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻一件）
	宋室劉氏 三件（皇族諸王との婚姻一件・尚公主二件）
南陽郡	張氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
	員氏 一件（尚公主一件）
琅邪郡	王氏 四件（皇帝の妃嬪二件・尚公主二件）
下邳郡	皮氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）

廣平郡	程氏 二件（皇族諸王との婚姻二件）
方城郡	祖氏 一件（尚公主一件）
勃海郡	刁氏 四件（皇族諸王との婚姻二件・尚公主二件）
	高氏 二件（皇族諸王との婚姻二件）
	高句麗高氏 四件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻一件・尚公主二件）
河東郡	薛氏 三件（皇族諸王との婚姻三件）
	裴氏 一件（尚公主一件）
河内郡	晋室司馬氏 五件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻一件・尚公主三件）
蘭陵郡	齊室蕭氏 三件（皇族諸王との婚姻一件・尚公主二件）

② 代北諸姓（総計…二二件）

河南郡（洛陽）	于氏 六件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻四件・尚公主一件）
	穆氏 六件（皇族諸王との婚姻五件・尚公主一件）
	陸氏 三件（皇族諸王との婚姻一件・尚公主二件）
	乙氏 二件（皇族諸王との婚姻一件・尚公主一件）
	閻氏 二件（皇族諸王との婚姻二件）
	吐谷渾氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
秀容郡	爾朱氏 一件（尚公主一件）

③ 閔隴諸姓（総計…一八件）

隴西郡	李氏 六件（皇帝の妃嬪一件・皇族諸王との婚姻四件・尚公主一件）
安定郡	胡氏 八件（皇帝の妃嬪三件・皇族諸王との婚姻四件・尚公主一件）
	梁氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
京兆郡	韋氏 一件（皇帝の妃嬪一件）
	杜氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
南安郡	譙氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）

④ 東北諸姓（総計…五件）

昌黎郡	蘭氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
遼西郡	常氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
遼東郡	公孫氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
楽浪郡	王氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）
	韓氏 一件（皇族諸王との婚姻一件）

に明らかな偏りが存在している。閔隴は新興勢力の隴西李氏が六件である。合計で五〇件なのであるが、そのうちの二九件を山東系が占めている。

外戚勢力については仔細をみると、孝文帝後期は、二皇后・一昭儀を出した馮氏が計七件（諸王との婚姻六件・公主との婚姻一件）、文昭皇后を出した高氏が計一件（諸王との婚姻一件）、于氏が計二件（諸王との婚姻一件・

公主との婚姻一件）で、宣武帝期は、馮氏が計二件（諸王との婚姻一件・公主との婚姻一件）、高氏が計三件（皇帝の妃嬪一件・公主との婚姻二件）、于氏が計四件（皇帝の妃嬪一件・諸王との婚姻三件）、胡氏が計三件（皇帝の妃嬪一件・諸王との婚姻二件）、孝明帝期以後になると、胡氏のみ五件（皇帝の妃嬪二件・諸王との婚姻二件・公主との婚姻一件）確認できる。つまり、孝文帝後期は馮氏が圧倒的に優勢で、高・于・胡氏がそれぞれ皇后を出した宣武帝期は、これに馮氏をくわえた四氏が分け合う状況となり、孝明帝期以降は、孝明帝の皇后および昭儀を出した胡氏の独占状況へと推移しているのである。おおまかにいえば、前半の馮氏から後半の胡氏への変化が生じたということになる。その背景には、当然のことながら、各氏の後ろ盾となった皇后の存在がある。

周知のとおり、馮氏の繁栄は臨朝称制をした文明太后馮氏にはじまる。自己の一門の政治的地位を盤石なものにしようと考えた太后は、『魏書』卷八三上外戚伝上・馮熙伝に、

高祖前後納熙三女、二為后、一為左昭儀。由是馮氏寵貴益隆、賞賜累巨萬。

とあるように、実兄馮熙の娘三人を孝文帝の後宮に納めた。皇后となった娘のひとりが廢皇后であり、いまひとりが幽皇后である。また馮太后が太和一四（四九〇）年に亡くなったのちも、『魏書』卷八三外戚伝上・馮穆伝に、

〔馮〕脩弟聿、字寶興、廢后同産兄也。位黃門郎・信都伯。後坐妹廢、免為長樂百姓。世宗時卒於河南尹。……

崔光之兼黃門也、與〔馮〕聿俱直。光每謂之曰「君家富貴太盛、終必衰敗。」聿云「我家何負四海、乃呪我也。」光云「以古推之、不可不慎。」時熙為太保、誕司徒・太子太傅、脩侍中・尚書、聿黃門。廢后在位、禮愛未弛。是後歲餘、脩以罪棄、熙・誕喪亡、后廢、聿退。時人以為盛必衰也。

とあるように、廢皇后馮氏を後ろ盾とする馮熙・誕父子によって馮氏は隆盛をきわめた。しかし馮脩が実兄馮誕の毒殺を目論んだ罪で官位を剥奪され平城の庶民に落とされ（『魏書』卷八三外戚伝上・馮誕伝）、つづいて太和一九

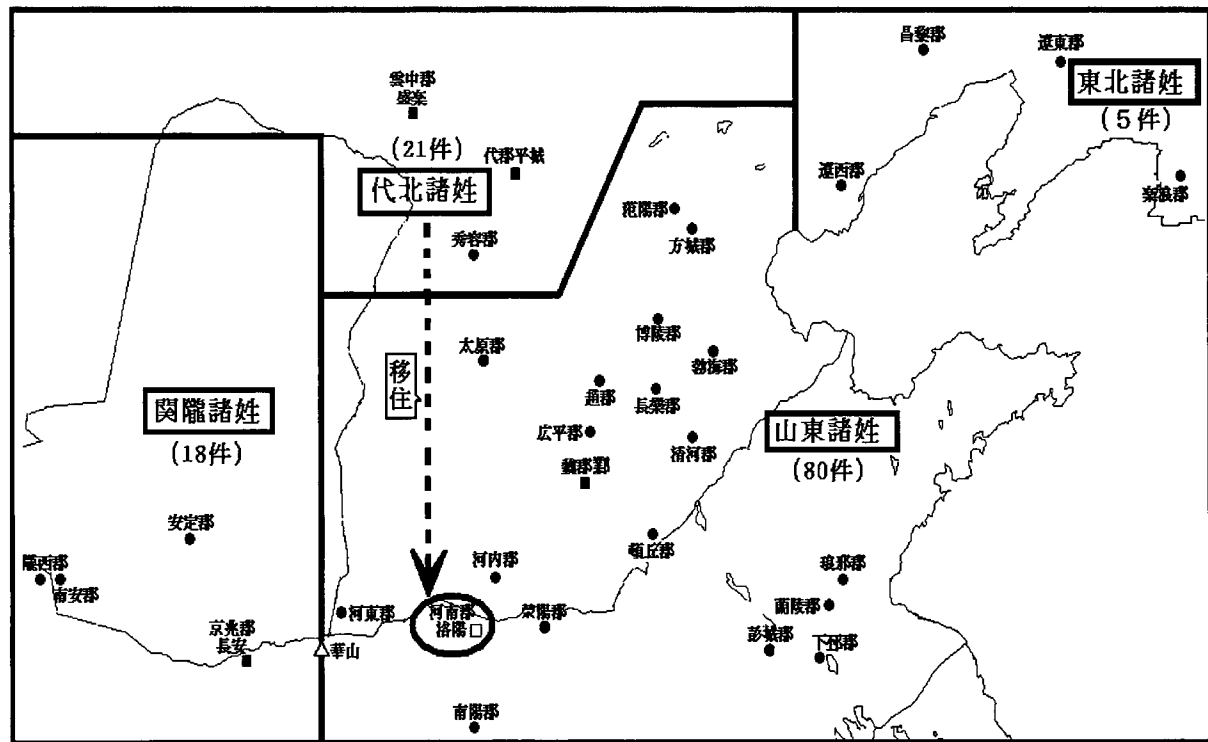
(四五〇)年に、熙・誕父子がともにこの世を去ると、後援者たる皇后も廃され、事も失脚して長樂郡の庶民に落とされた。このように瞬く間に馮氏の権勢は衰えていったのである。

最後に、孝文帝から孝莊帝期までを通してみると、通時代的に通婚関係が認められるのは、范陽盧氏(一件)・清河崔氏(六件)・河南穆氏(六件)の三氏のみであった。通時代的に繁栄したのは、非常に限られることが、これより判明する。范陽盧氏と清河崔氏が北魏前期より累代通婚を重ねる関係にあり、また両氏が山東を代表する存在であったことはよく知られることであるが、北魏後期においては、元氏と通婚することで、唐代に名族と見なされる地位を築き始めたことを指摘することができる。一方、穆氏は、「八姓」のなかにあつて唯一、北魏前期に公主が降嫁され続けた一門であり、かかる特異な立場を後期においても維持していたことが分かる。

おわりに

以上の分析結果をまとめると、皇室は海内の諸姓と広く婚姻しているものの、地域的には山東に偏っていた。婚姻相手に山東系が求められる傾向は、北魏前期に既に認められるものであるけれども、北魏後期に至って、より顕在化しているように思われる。また、「代北八姓」や「四姓」の諸氏族、外戚勢力との婚姻が過半を占めた。

ただし、「代北八姓」や「四姓」の諸氏族の内訳をみると、劉氏・尉氏・賀氏・樓氏・嵇氏との婚姻は皆無で、ここにも偏りが認められる。しかも、通時代的に通婚関係を構築しえたのは、穆・崔(清河)・盧の三氏のみであった。つまり、婚姻相手は山東諸姓に集中し、ついで外戚勢力が多く、「代北八姓」などは比較的少ないということになる。



かかる諸特徴は、孝文帝期から見出しうることであり、北魏後期を通じての共通傾向と考えて良い。従来は、氏族詳定政策によって、皇室は「代北八姓」および「四姓」と通婚関係を構築し、それを基盤に胡漢融合を促進し、政権を形成したと考えられてきたが、実態としては、洛陽遷都によって重きが置かれたのは山東諸姓との関係性であり、彼らとの結びつきをより一層密にし、山東地域を主たる存立基盤として政権を構成していたということになる。

隴西の李氏が「四姓」のひとつに数えられること、また河東薛氏・頓丘李氏・楽浪韓氏などの存在から考えて、中・下層の氏族が擡頭し、皇室と婚姻関係を構築していたのは事実とみて良いが、上記の共通傾向を考慮すると、氏族詳定によって出現したのは、崔・盧・鄭・趙李を筆頭とする山東諸姓、穆・陸の代北二氏、馮・高・于・胡氏の外戚勢力を主軸にしつつ、中・下層の諸姓による上昇運動を吸収していく体制であったように思われる。

さらに言えば、皇帝主導のもとに、海内諸氏のヒエラルヒーを創出し、皇室を中核とする姻戚集団を構築するという政策は、漢族王朝にはみられないものである。一方、北アジアに目を転ずれば、君長主導のもと部族再編が行われることはしばしばあり、外戚集団の構築についても、先引の『後漢書』南匈奴伝の記事にみえる匈奴单于の外戚集団にその類例を見出すことが可能である。

たしかに、李冲をはじめとする漢族士大夫がこの政策に深く関与したことは間違いない。また、唐長孺氏や川合安氏のごとく、曹魏以来、漢族社会に存在した氏族尊重の風潮を制度化したという評価も妥当性をもっている⁽¹⁸⁾。

先述の清河崔氏と范陽盧氏の通婚関係のように、当時の漢族社会では、社会的に同格と認知されていた氏族同士が好んで通婚することで、その社会的立場を維持していたからである。しかし、両氏も認めておられるように、皇帝主導で海内諸氏の家格を制度的に決定した点はやはり非中国的であるといわねばならない。そのうえ、本稿で確認

してきたように、そのヒエラルヒーが皇室を中心とする姻戚集団をいただくという点を考慮すれば、この政策の根幹は「北アジア的」発想であったと思われる。ただし、氏族詳定は代国時代以来の鮮卑系貴顕のみではなく、これに漢族を含めた海内諸氏を対象としていたことから、漢族社会の氏族尊重の風潮も利用したのである。以上の点に北魏の際立った独自性を見出すことができる。

すなわち、元来、平城を中心とする雲代地方と、鄴を中心とする山東地方との連合を基盤として成立した北魏は、洛陽遷都によって、華北全土、さらには江南併合までを視野に入れた「天下国家」構想を掲げ、これを支える基盤を確かなものとするために、姻戚集団の構築を以て山東地方への土着化を進めていったのである。洛陽遷都以降の「北魏貴族制」とは、「北アジア的」発想によるプリミティブな血の紐帯を根幹に、漢族社会の氏族尊重の風潮を利用して形成されたものといえるであろう。⁽¹⁹⁾

従って、逆に言えば、北魏の関隴地域における支持基盤は決して盤石なものではなかった。このことを考えると、北魏の東西分裂、そしてその後続く北斉・北周の抗争は必然であったように思われるのである。

〔追記〕 本稿は、学習院大学東洋文化研究所東アジア学共創プロジェクトの研究成果である。

註

(1) 梶山智史「北朝墓誌所在総合目録」(『東アジア石刻

研究』創刊号、二〇〇五年、七四〜一三〇頁)を参照。
(2) 石刻資料を用いた数少ない研究として魯才全「長樂

馮氏与元魏宗室婚姻關係考——以墓誌為中心」(『魏晉南北朝隋唐史資料』一四輯、一九九六年、六八～七八頁)があるが、これは論題に明らかなように、皇室と馮氏との婚姻關係に論点が絞られている。遼耀東「拓跋氏与中原土族的婚姻關係」(『從平城到洛陽』中華書局、二〇〇六年)は、石刻資料も引用しつつ、皇室と漢人士族の婚姻關係を論じたものであるが、その議論は概括的で、從來理解の域を脱するものではない。

- (3) 唐長孺「論北魏孝文帝定姓族」(『魏晉南北朝史論拾遺』中華書局、一九八三年)が、中・下層から上昇してきた隴西李氏や河東薛氏などの新興諸姓の存在に、また谷川道雄『隋唐帝國形成史論』(筑摩書房、一九七一年)もやはり、李彪を出した頓丘李氏、韓麒麟や顓宗を出した昌黎韓氏、そして李冲の隴西李氏などの中・下層氏族の擡頭に注目している。

- (4) 谷川前掲書、唐前掲論文、宮崎市定「九品官人法の研究——科挙前史——」(同朋舎、一九五六年)、川本芳昭『魏晉南北朝時代の民族問題』(汲古書院、一九九八年)、高升記「試論北魏孝文帝定姓族」(『山西大学学报(哲学社会科学版)』一九九五年第一期、六九～七五頁)などを参照。

- (5) 井上晃「後魏氏族分定攷」(『史観』第九冊、一九三五年、一〇〇～一二四頁)参照。
- (6) 唐前掲論文参照。

- (7) 宮崎前掲書参照。

- (8) 陳爽「四姓辨疑、北朝門閥体制的確立過程及其歷史意義」(『世家大族与北朝政治』中国社会科学出版社、一九九八年)参照。

- (9) 『魏書』卷七高祖紀下・太和二〇年春正月丁卯条參照。

- (10) 皇室の婚姻を論じた研究としては、このほかに高詩敏「北朝皇室婚姻關係の嬪嬙与影響」(『民族研究』一九九二年第六期、九一～九八頁)と、馮素梅・付瑞紅「北魏孝文帝時期的婚姻制度」(『北朝研究』第四輯、中州古籍出版社、二〇〇四年、一〇一～一〇七頁)があるが、前者は、北朝全体を扱うため概括的であり、從來理解の域を脱してはいない。また、抛る資料は文献史料に限られる。後者もまた概括的であり、抛る資料は文献史料に限られている。

- (11) 筆者は、北魏前期の皇室の婚姻動向に関しても研究を進めており、その研究成果の詳細は、「代王国・北魏前期の拓跋氏の婚姻動向」と題して、「中国石刻合同研究会」(二〇〇八年七月二六日、於明治大)にて報告した。

- (12) ただし、これには、孝文帝期にカテゴライズされた「四姓」の氏族が含まれていない。

- (13) 註(11)に同じ。

- (14) 『魏書』卷四七盧玄伝附度世伝参照。

(15) 註(11)に同じ。なお、朝貢国への公主降嫁については、藤野月子氏に論考がある。「漢唐間における和蕃公主の降嫁について」『史学雑誌』第百十七編第七号、二〇〇八年、三八〜五七頁、「五胡十六国北朝における和蕃公主の降嫁」『歴史学研究』第八五五号、二〇〇九年、二六〜四一頁)参照。道武帝に始まる北魏の和蕃公主の降嫁は、あたかも前漢高祖の故事に端を発したものであるかのごときよみかえによるものであり、その実、「北方的」要素を有した北魏独自の外交政策であったとする氏の説は、興味深い。この点、筆者も別稿で考察を試みてみたい。

(16) 以上、『魏書』卷五九劉昶伝参照。

(17) 註(11)に同じ。計九件の降嫁が確認できる。

(18) 唐前掲論文、川合安「柳芳「氏族論」と「六朝貴族制」学説」(平成一七(二〇〇五)年度〜平成一九(二〇〇七)年度科学研究費補助金(基盤研究)(C)研究成果報告書『「六朝貴族制」の学説史的研究』二〇〇八年)を参照。

(19) このように考えると、北魏の延長線上におかれる北周・北斉、さらには隋唐代の「貴族制」も、「北魏貴族制」と同様の性格をもっているか、少なくとも影響を受けている可能性が浮上するが、詳細に関しては、今後の課題としたい。

Imperial family's marriage policy at period in the latter half of Northern Wei: Aiming at the clarification of an empire imagery of Northern Wei.

SATO Masaru

Key Words: Northern Wei (北魏), Emperor Xiaowen (孝文帝), imperial family (皇室), marriage policy (婚姻政策), Aristocratic system (貴族制)

In 494, Emperor Xiaowen (孝文帝) moved the Northern Wei (北魏) capital from Pingcheng (平城) to Luoyang (洛陽). Emperor Xiaowen (孝文帝) tried to deepen the collaboration between various races except Hanzu (漢族) and literati throughout northern China, and conducted “detailed determination of families and clans” (*Xingzu xiangding* 姓族詳定). Then, how was the actual situation?

This paper seeks to investigate the actual situation of *Xingzu xiangding* from the marriage perspective. From historiography and historical materials, I studied the marriage of successive emperors, imperial families, kings, emperor's daughters and tabulated the outcomes of the study. As a result, as the partners of the imperial families in late Northern Wei, the clan from Shangdong (山東) tops the list, followed by the maternal relative and *Daibei baxing* (代北八姓).

In other words, Northern Wei attempted to annex all of northern China area and southern China area by moving the capital to Luoyang. So the emperors built relative groups and settled into Shangdong area.

In my opinion, after moving the capital to Luoyang, “Aristocratic system in Northern Wei” was shaped on the basis of the primitive blood relationship in Northern Wei.